
野球場へ行こう！

ぱくどら

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

野球場へ行こう！

【Nコード】

N7842B

【作者名】

ぱくどら

【あらすじ】

野球大好きなひろこと、ルールも知らないミサの野球場での観戦風景。野球を知らない人たちに読んでもらいたい作品です！少しでもルールがわかってもらえればいいなあと思います！

野球場へ行こう！

(前書き)

地元チームが出てきますが、このようなチームは存在しません(笑)
ただ、あるチームを参考に書かせてもらいました。
わかるかなあ。

野球場へ行こう!

フェンスの低い外野スタンド。一番狭いことで有名な野球場に観戦をしにひろことミサがやってきた。

もちろん地元将球団プーカの応援のため、ライトスタンドの一番前の席に腰掛ける。

球場が狭いので、一番前の席に座るとすぐ目の前に選手の背中が見える。守備につき、キャッチボールをするプーカのライト鳥山^{とりやま}。

真夏の日差しの中、ひろことミサは照りつける太陽を避けるために日焼け止めを塗り、タオルを頭から被り、メガホンを手に持つ。

電光掲示板に今日の両チームの先発が発表される。

「今日の先発は白田^{はくた}だー！絶対勝つぞー！」

自前で買った地元チームのユニホームを身にまとっているひろことが笑いながら言った。

「エース様だもん。三者凡退よー」

白田は地元チーム『プーカ』のエース。しかし、隣で聞いているミサは全くわからない。というのも、今日ここにいるのはひろこからの誘いだつた。

ミサは野球のことをほとんど知らない。

「…エース様？三者凡退？なにそれ？」

「あ、ミサは野球のこと知らないのよねえ。…今日は私がいっぱい教えてあげるから、プーカのこと応援しようね！」

「う、うん…」

ミサはスタンドを見渡した。プーカのチームカラーである赤に染まっている。応援団の太鼓の音とトランペットが響く。

太鼓とトランペットがむぎだすリズムに合わせ、スタンドのプーカファンがメガホンを叩いている。

「す、すごい応援だね。…ところで」

隣でわくわくと目を輝かせているひろこが、ミサの問いかけに叩

野球場へ行こう！

くメガホンを止めた。

「…先発ってなに？それに…始まる前に野球のルール教えてほしいんだけど」

「え、ルールも知らないの?!」

思わず大声を出して驚いた。だが、応援が盛り上がっているせいですぐその声はかき消された。

ひろこの態度にミサは少しむっとした。

「…私を無理やり連れてきてその言い方はないんじゃないの…。だから野球知らないって言ったのに」

ひろこは慌てて説明を始めた。

「あ、いやいやごめん！えーとじゃあ、簡単に説明するね。

ルールは1塁2塁3塁と進んで、ホームを踏んだら得点。1回から9回までやって得点が多いほうが勝ち。

1回ってというのは相手の攻撃と自分の攻撃で1回。3アウトになったら攻撃をチェンジ。先発ってというのはマウンドで一番最初に球を投げる人のこと」

「……」

わかっていないのかミサの目が点になっている。そんな中、プレイボールがかかり、マウンドに立っている白田が投げ始めた。

「う、うーん。まあ見ながら説明しようか」

「じゃあ、あれなに？」

ミサが指差したのは電光掲示板だった。

「いろんな人の名前が連なっているけど…なにか意味あるの？」

「あああれは打順だよ」

「打順？」

見ると、左からプーカとあり

6 煩ほん 4 東野とうの 7 後田あごた 5 細井ほそい 9 鳥山 3 桃山ももやま 8 尾田おた 2 蔵本くらもと

1 白田

と書かれている。

「あの上の数字の順番に打つの？」

「ううん、あれは守備の番号。」

1はピッチャー、2はキャッチャー、3はファースト、4はセカンド、5はサード、6はショート、7はレフト、8はセンター、9はライト」

「またもやミサは首をかしげた。」

「その…守備の位置がいまいちわからないんだけど。…じゃあこの人はどこ？」

と指を差したのは、鳥山の背中。丁度、ボールが鳥山のところまで来た。高く上がったボールは鳥山のグラブの中に納まった。

すると、応援団が太鼓とトランペットを鳴らしそれに合わせて観客がメガホンを叩く。大きな音が球場をこだます。

「え、なにになに?!」

いきなりなことミサは驚ききよきよと見渡した。

そんなミサを見てひろこは笑いながら説明した。

「はは。今アウトを取ったからメガホンを叩いたんだよ。でね、鳥山はライト。」

「…じゃあまず守備の位置から説明しようか。一番奥で3人の人がいるの見える？」

ひろこが指差した方向をミサが見た。

3人…しゃがんでいる人とその後ろで黒いなにかをつけた人となにか手に持っている人がいる。

「見えたけど…あの人たちがどうしたの？」

「あそこがホームベースがあるところなの。しゃがんでいるのは、キャッチャーの蔵本。その後ろにいる人は審判、バット持っている人は相手バッター」

「ふーん…」

野球場へ行こう！

白田が投げたボールをバッターが打った。が、ファーストへのゆるいゴロでそのボールを取った桃山は自分でベースを踏んだ。再び応援団が太鼓とトランペットを鳴らし、メガホンがゆれる。

「…今アウトになったの？」

「うん。今取った人がいるでしょ？あれが桃山。で、踏んだのは1塁。」

ホームベースから左回りに1塁、2塁、3塁って言うの。白い四角いものが見えるでしょ？あれがそうよ。」

ミサは目を凝らしてみた。確かに白い四角いものが見える。

「1塁の前にいるのがファースト、1塁と2塁の間にいるのがセカンド、2塁と3塁の間にいるのがショート。3塁の前にいるのがサード。」

その4つのベースを結ぶダイヤモンドの中で投げているのがピッチャー。これを大まかに言うとな内野っていつの。

で、その内野よりも外にいる人が外野。ホームベースから見て左からレフト、センター、ライトって言うのよ。」

「ふーん…」

ひろこの熱心な説明に、ミサはうなづいて答えた。

「大体わかったような…。じゃあどうやったらアウトになるの？」

「えっとね、フライを打ち上げてノーバンで捕ったり、バッターがファーストに行くまでに守備がファーストに投げたり

あとストライク3つを取ったり…大まかなアウトはこんなもんかな」

「フライをノーバウンドで捕るっていうのと、ファーストに投げられていうのはなんとなくわかるんだけど、ストライク3つってなに

「？」

「うーんと…あ、今丁度いいや見てみて」

とひろこが指差したのは電光掲示板の右側。

見ると上からSBOと並んで、Sの横には黄色いランプが2つ点り、Bの横には緑のランプが1つ点り、Oの横には赤いランプが2つ点っている。

「なにあれ？」

「あれはね、カウント。SはストライクのS。BはボールのB。OはアウトのO。だから今は2ストライク、1ボール、2アウト。ストライク3つのストライクっていうのはあのことだよ」

ひろこがそう言い終えたあと、スタンドが盛り上がった。

見ると白田が三振を取ったらしく、今からプーカの攻撃が始まるからだった。

「…じゃあ今白田って人がストライク3つ取ったからアウトになったの？」

「うん！3つアウト取ったから今度はプーカの攻撃よー！」

1回の守備があっさり終わったためか、ひろこの顔は終始笑顔だった。応援するため再びメガホンを握り締めている。

「…ふーん。なんとなくわかった気がする」

ミサは電光掲示板のカウントに目を向けた。先ほど点っていたランプは消えていた。

代わりに、上のほうにある1から9まで数字とプーカと相手チーム名が書かれた表のようなものに、新たに0が入っていた。

「でもまだ、どうやったら点が入るのかいまわからないんだけど…」

「ぼーん！かつとばせ！ぼーん！」

隣のひろこに視線を戻すと、ひろこは応援団のリズムに合わせて、メガホンを叩きスタンドのファンと一緒に応援に大声を出していた。

野球場へ行こう！

「まあいいか。プーカの攻撃が終わったらゆっくりと聞こえ」

強い日差しの中、ミサは汗を流しながらもマウンドに目を向けた。スタンドは日差しに負けないくらい熱気に溢れている。

(後書き)

いかがでしたか？野球は9回までありますが、まだ1回の相手チームの攻撃しか終わっていません。ルールを説明したのもほんの一部です。

シーズンが開幕してテレビで放映されるのも多くなってくる季節です。ルールを知らないと見ようという気も起こりませんよね？

野球はとつてもおもしろいです。少しでもルールを理解していただいで一緒に野球を楽しみましょう。

この話に続編があるのかは…わかりません。でも、もしかしたらあるかも。

よろしければ評価感想をお願いします！

野球場へ行こう！

野球場へ行こう！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7842b/>

野球場へ行こう！

2009年7月3日19時03分発行